日本と国際社会の架け橋となった新渡戸稲造

武士道を通して日本人の道徳を説き実践した国際人

明治時代、わが国の多くの青年が欧米諸国に留学した。1884（明治17）年、22歳で米国に渡った新渡戸稲造（1862～1933）もその一人であった。

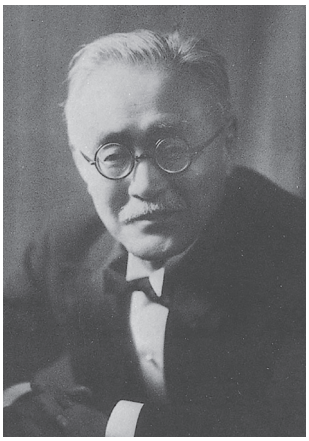
あるとき、ベルギーの法学者ド＝ラヴレーから、道徳教育の源泉として宗教教育が日本に存在するか、との質問をうけた。このことがきっかけとなって、新渡戸は、日本人の道徳観念の根源について思索するようになる。また、米国人の妻メリーからも、日本人には自明であるものの考え方や行動様式について、たびたび質問をうけていた。

こうした体験をもとに、新渡戸は1900（明治33）年、『武士道』を英文で著し、米国において出版した。新渡戸によれば、武士道とは、わが国の長い歴史のなかで神道を基盤とし、仏教や儒教を受容しつつ形成された道徳であり、倫理の源泉であったとして、その将来について次の言葉を残している。

「武士道は一つの独立した道徳の掟としては消滅するかもしれない。しかしその力はこの地球上から消え去ることはない。その武勇と文徳の教訓は解体されるかもしれない。しかしその光と栄誉はその廃墟を超えて蘇生するにちがいない」

聖書やギリシャ・ローマの古典などが豊富に引用され著された『武士道』は、わが国が日清・日露の２つの戦争に勝利をおさめた精神力の源泉であるとして、世界中から注目され、17カ国語に翻訳されるなどベストセラーとなった。

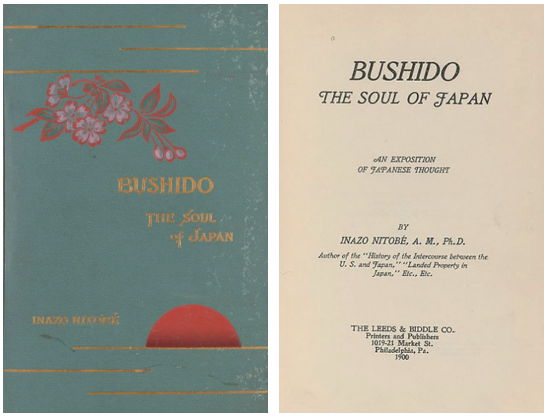
若いころ「願わくは　われ太平洋の橋とならん」との志を抱いていた新渡戸は、東京大学に進み、アメリカ、ドイツの大学へ留学。帰国後は、台湾総督府技師となり製糖業の発展に尽くし、東京帝大教授や東京女子大初代学長を歴任した。


▲新渡戸稲造

1920（大正9）年から7年間、国際連盟事務次長として第一次世界大戦後の国際協調に活躍。在任中、ノーベル賞受賞者などを委員として、教育、文化の交流、著作権問題などを審議する知的協力委員会を発足させた。これは現在のユネスコに引き継がれている。

晩年の1932（昭和7）年には、満州事変勃発後の日米関係の悪化を修復するため、日本の立場や政策への理解を求めて全米を100回以上講演行脚するなど、日米関係の修復に尽力した。

新渡戸は、自身が『武士道』で著した「義」「仁」「礼」「名誉」「忠義」などの徳目を実践した日本人として、その名を国際社会に残した。



▲アメリカで出版された英文の『武士道』の表紙と中扉